

## 幕末・明治初頭の英語事情

### 植村 榮

幕末の開国に向けての諸外国との外交交渉では、正式文書の交換も会話もすべてオランダ語で行われておりオランダ通詞が活躍したことを前回（44話：本誌 2025, 78, 489）で述べた。しかし、すぐに英語が力をもつことになる。それを如実に物語るもの一つとして、自伝文学中の最高傑作と称される福澤諭吉（1834～1901）著の「福翁自伝」（1899年刊行）（写真）がある。それによると、福澤は長崎・大阪でオランダ語を習得した後、1858年に自信をもって江戸に出て蘭学中心の洋学塾を開いたが、その翌年開港間もない横浜に行ったところ、そこではオランダ語が全く通じず、また目につくおそらく英語の看板もほとんど理解できず、大きな衝撃を受け、これからは英語だと強く認識する。早速に、前回触れたオランダ通詞・森山栄之助の英語塾の門を叩くのだが森山にはほとんど会えず、そのうちに彼の英語も大したことないと決めつけて、そこで習うことを早々に断念、独学で勉強する以外ないと決心し、自らの塾も英学塾に転換する。この森山に関するあたりは筆者が知る当時の史実とは少し異なるが、福澤の英語への強い心情がそう言わせたのかもしれない。1860年に「幕府外国方 翻訳方」に採用され、英米国の公使館から回ってくる英文の公文書にオランダ語がついていたのでそれらを対照することで英語力を磨いたとある。幕府の咸臨丸での渡米とウエブスターのアメリカ英語辞典購入、遣欧使節団への随行や再渡米での多くの英書購入など、非常に積極的に英語の世界に足を踏み入れている。1868年（慶應4年）には自らの英語塾を慶應義塾と改称し、そこで教えることはすべて英学とし、英語を読み書きし解釈する教育において多くの優れた人材を育てたのである。

同じ年に、これも幕府翻訳方であった備中国出身の蘭学者・箕作秋坪（みつくりしゅうへい）（1825～1886）も英学塾「三叉学舎」を江戸に開設、福澤の塾と双璧と言われ、東郷平八郎や原敬など多くの有能な人物が在籍した。この私塾はその後10年ほど続いている。

もう1人、江戸末期1864年に長崎で英語の私塾を開いた何礼之（がのりゆき）（1840～1923）に触れたい。彼は代々唐通事の家柄の人物だが、幕府が1858年に長崎に開設した英語教育機関「長崎英語伝習所」で英語を学び、さらにオランダ系米国人宣教師フルベッキ（G. H. F. Verbeck）（フェルベックとも：後に開成学校および大学南校教頭）（1830～1898）から本式の英語を学んでいる。この伝習所には大隈重信や副島種臣などが生徒として在籍しており、一方、何が開い



写真 福澤諭吉著：改定「福翁自伝」（1954年刊、岩波文庫）（筆者所蔵）と長らくお世話になった福澤翁

た長崎での英語塾では前島密や高峰譲吉ら非常に多くの塾生が学んでいる。1867年に江戸に出て開成所教授並となり英語の私塾も開いたが、翌年舎密局創設のために大阪に赴き、洋学（主に英語）を基礎とした一般普通教育を目的とする官立の「大阪洋学校」（京都大学に繋がる）の初代校長となる。同時に英語の私塾「瓊江塾」（たまえじゅく）を開いたが、そこにも全国から多才な人物が集まっている。

このように彼ら洋学者がそれぞれ私塾を開いて英語を教えたが、幕府も決して手をこまねいていたわけではない。黒船来航のほぼ3年半後の1857年には江戸に洋学教育研究機関として「蕃書調所」を開設、また、その翌年には先に述べたように「長崎英語伝習所」を開設している。この調所では最初はオランダ語教育だけだったが、「洋書調所」、「開成所」と改称されるにつれて英語やフランス語の教育も行われるようになった。しかし、いずれでも洋書や外交文書の翻訳が主たる仕事であり、会話などの教育にはほど遠かったようである。明治新政府には「開成学校」ついで1869年に「大学南校」（東京大学に繋がる）となって引き継がれ、そこでやっと上述したフルベッキなど母国語を話すお雇い外国人を教師にして英語を含む外国語の修得が可能となったのである。

ここで英語での会話という面からでは、米国で10年間近く過ごした土佐の漁師の漂流民、ジョン万次郎（1827～1898）が大きな役割を果たしている。1851年に帰国、その後2年後には中浜の姓を授かって幕府直参となり、1856年に築地軍艦操縦所教授として箕作麟祥や大島圭介らに、また私塾では福地源一郎、福澤諭吉、榎本武揚らに英語を教えていた。当時の日本人としては唯一母国人に近い英語（米語）を話せた人物であろう。1860年に咸臨丸で渡米した際には通訳として活躍、1866年には開成所教授となり、その後6年後に引退するまで多くの人たちの英語教育に携わった。

電子機器もなく英米人との接触もごく稀だった時代に非常な努力の下、英語の世界に一歩一歩と入って行かれた多くの先人たちに大いなる敬意を表したい。

うえむら・さかえ  
京都大学名誉教授・日本化学会フェロー/化学遺産委員会顧問